

『モチモチの木』 齊藤 隆介作

枚方市立樟葉小学校 近藤 恵子

一、齊藤隆介について

この実践は四年生の子どもたちと取り組んだものです。樟葉北小では、校内研究の教科がこの年から国語になりました。低学年、中学年、高学年のグループに担任外の先生も入り、ブロックをつくって、研究してきました。

三・四年生は、三年生の若い先生が研究授業をすることになり、教材はその先生の希望で『モチモチの木』になりました。そこで、四年生でも『モチモチの木』を取り上げるようになったのです。

齊藤隆介の作品は、二十代、三十代頃までは、よく実践していました。特に好きな作品は『ペロ出しチョンマ』でした。そのころ民話採集の活動も盛んで、創作民話という言葉も生まれました。木下順二、松谷みよ子、齊藤隆介らが創作民話の中心でした。彼らは、古くから語り継がれてきた昔話を、思想性・形象性ともにすぐれた民話として再創造していました。教科書にも、民話がたくさん取り上げられていました。

その中でも、齊藤隆介は画家の滝平二郎と組んで多くの絵本を送り出し、児童文学界のスターでした。

齊藤隆介は自分の書こうとした「創作民話」について次のように語っています。一私のいう「創作民話」は、伝承民話の豊かさと力を受け継ぎながら、それを超える積極的で意志的な姿勢をはっきり持たなければならぬと考えている。従来の社会を変革して、人民のための社会を建設しようとする意欲を持たなければならないそのたたかいに参加する中で自己の変革もやり遂げて行くのだ。これが自分の「創作民話」に課している私の中心命題だ。革命的ロマンチズムの追求と言ってもいい。一（『齊藤隆介全集』岩崎書店）

しかし、齊藤隆介の作品については、以前から評価が分かれていました。齊藤隆介の作品で描かれる「献身」や「自己犠牲」に対する反発がありました。自己の生命を他者のために投げ出すことは、戦争に繋がり、戦前の「修身」のような臭いがするという声もありました。批判する人たちは、「自己犠牲」をあまりに「英雄的」に描くことにも危険を感じていたのだと思います。

私自身は、四十代に入ると、だんだん齊藤隆介の作品からは遠ざかっていきました。理由は、彼の描く「献身」や「自己犠牲」が説教くさく思えてきたからです。

ですから、『モチモチの木』に決まった時、「『モチモチの木』はやりにくいな。」と思いました。『モチモチの木』のじさまの台詞は説教くさいし、主題をじさまに言わせてしまっている作品をどう扱えばいいのかという思いもありました。

しかし、サークル活動を休止していて、集団で作品を読み合う機会は、この校内のブロック研だけだったので、集団で教材研究ができることは楽しみでもありました。また、私が先行して授業をし、すべての時間を三年生の先生たちや新任の先生が参観し、検討していくというやりかたも、自分の実践を見つめなおす上でもいい機会だと思いました。

その期待通り、ブロックのみんなで読み合う時間は楽しく充実したものになりました。

二、『モチモチの木』と子どもたち

この四年生の半分の子どもたちは、三年生でも担任していました。三年生の終わりに転校した児童がいて、二年級から、一学級になってしまいました。四十二人の学級でした。

この学級には、ダウン症の麻耶さんがいます。麻耶さんは、心臓疾患もかかえていて、走ることも苦手です。

麻耶さんは、国語はほとんど支援学級で学習しているので、『モチモチの木』の授業にも数回しか参加できませんでした。感想には「まめたは、じさまにしんでほしくないから、ないてはして、なみだがとまらない。」と書いていました。この作品が大好きで、音読も意欲的に取り組んでいました。

友樹君は、幼稚園の時から、〈クレヨンしんちゃん言葉〉でしか話せません。それをまねして、同じ学年の何人かの男の子も三年生までは、〈クレヨンしんちゃん言葉〉でした。音読の時も独特のイントネーションになってしまいます。お母さんたちも悩んでいました。その中のあるお母さんは「クレヨンしんちゃん言葉で、自分を守っているのだと思います。」と書いていました。

友樹君は、悪いことにあこがれ、他の子を誘っては校区外に遊びに行っていました。家庭では、両親に対して反抗的で両親とも一人っ子の友樹君の接し方について悩んでいました。『悪事ノート』を作っているらしいのですが、母親は心配しながらも、本人にも聞けないでいました。

周りの子どもたちは、友樹君といるとおもしろいから初めは一緒に遊んでいましたが、だんだん彼の行動がエスカレートしていくと離れていきました。いっしょにいと大人に叱られることが多くなると気づきだしたのだと思います。何人かを残して、友樹君の周りからだんだん友だちが減っていきました。

でも、大胆で大人に反抗できる友樹君は、一部の子どもたちからは「勇気のある子」「強い子」と見られていました。でも、本当の友樹君は、決して「強い子」ではなく、傷つきやすい子どもでした。彼は「真面目」であることは「弱い」ことだと思っていた。私と一対一で話す時だけは、普通の言葉でした。『悪事ノート』に書いたことも話してくれました。「人と違うことをして強いと思われたい」「何でも、自分が悪く思われるのがいやだ。」とも話してくれました。

子どもたちは「勇気」について、深く考えてはいません。

また、子どもたちは、よく「やさしい」といいます。子どもたちの考える「やさしさ」とは、「助けてくれたからやさしい」「はげましてくれたからやさしい」といった受身のものが多いようです。また、文学の授業でも「〇〇はやさしい」「かわいそう」といいます。このように人物を類型的にまとめてしまうと、それ以上は深まりません。

『モチモチの木』のじさまが言う「やさしさあれば、やらなきゃならねんことは、きっとやるもんだ。」の「やさしさ」がどんな行動や形で表されているのかをつかみ、その意味を深く考えさせたいと思いました。

三、『モチモチの木』について

豆太は、とうげのりょうし小屋で、じさまと二人で暮らしています。豆太は、昼間はやんちゃで甘えん坊ですが、夜になると一人でせっちんにもいけません。じさまは、父母のいない豆太をふびんだと思い愛情深く育てています。

そんな豆太は、腹痛で苦しむ大好きなじさまを助けよう
と思い、無我夢中で冬の夜道を医者様を呼びに走ります。
その結果、「昼間だったら、見てえなあー。」と思っていた
モチモチの木に灯がともるのを見ることができたのです。

この作品の主題は、さきほども書いたように、じさまの
言葉の「人間、やさしささえあれば、やらなきやならねえ
ことは、きっとやるもんだ」ということです。だから、こ
の言葉を抜き出しさえすれば主題をつかむことができます。
しかし、この言葉だけを抜き出して読み合うと、徳目的な
授業になりかねません。この言葉をしっかり子どもたちに
考えさせるためには、「豆太は見た」の前半部分を主題場面
と位置づけ、しっかり読み合いたいと思いました。

この場面は、豆太が、じさまを心配するあまり、あれほ
どこわがっていた夜道を医者様を呼びに走る場面です。
「大らかなじさまの死んでしまうほうが、もっとこわかつ
たから」という表現に、これまでの豆太とじさまの関係が
象徴的に表現されています。そして、「やらなきやならねえ
ことは、きっとやるもんだ」ということが、豆太の行動に
表われています。ですから、授業では、ここの豆太のせつ
ぱつまった変化をしっかりとらえさせたいと思いました。

しかし、この作品は、豆太が急に勇気となる子どもに変
わったという作品ではありません。それは、最後の「それ
でも、豆太は、じさまが元気になると、そのぼんからじさ
まをしょんべんに起した」ということにも表われています。
「やらなきやならねえことは、きっとやるもんだ」という
ことは、どんな人間でも心の底に「やさしさ」を持ってい
れば、ぎりぎりのところで大きな力を発揮できるのだとい
うことだと思います。この場面も「やさしさ」の本質を考
えさせるためにも大切にしたい場面です。

◎ 『モチモチの木』の目標

- ① どんな人間でも、心の奥底に「やさしさ」があれば、
せつぱつまったぎりぎりの場面で大きな力を発揮でき
るのだということを知る。
- ② 「モチモチの木に灯がともる」ということは自然現象
によってありえることだが、見る側の人物によって意
味づけが違ったものになることを知る。
- ③ 山で生きる豆太やじさまと、自然の象徴である「モチ
モチの木」の関係を考える。

◎ 指導計画

- ① 全文を読み、はじめの感想を書く

- ② **おくびょう豆太**

豆太とじさまの人物像を読む・・・・・・・・一時間

やい、木い

豆太とモチモチの木の昼と夜の違いを読む。また変
わらぬじさまの豆太に対する愛情を読む・・一時間

霜月二十日のぼん

モチモチの木が見たいという豆太を読む・・一時間

豆太は見た

じさまを助けようと必死で医者さまをよび行くせ
つぱつまった豆太の変化を読む・・・・・・・・二時間

弱虫でも、やさしけりや

やさしさについて考える・・・・・・・・一時間

- ③ 終わりの感想を書き、交流する・・・・・・・・二時間

四、『モチモチの木』との出会い—はじめの感想より 書き出しがしかけ

乙女

『モチモチの木』の「おくびょう豆太」の最初の文の書
き出しが、今まで教科書で出てきたお話とはちがうパター
ンで、いつもは「むかしむかしあるところに、豆太とじさ
まがすんでいました。」という感じになると思うけど、「全
く、豆太ほどおくびょうなやつはない。」という始まり方だ
った。これも「しかけ」なのかなと思った。昔の言葉が多
かった。「空いっぱいにかみの毛を・・・両手を「わあっ」・・・」
というところでモチモチの木を人にたとえていることがわ
かる。

じさまは、とても豆太のことを愛していることが分かる。
豆太がどんな小さい声で「じさまあ」と言ってくれるじさ
まはやさしいなと思った。豆太のおとうは、くまと組うち
して死んだと聞いた豆太はきつとびっくりしたと思う。豆
太が、かわいそうだと思った。じさまは、六十四才になっ
ても元気だなと思った。豆太は、夜がこわいだけで、昼間
は元気な子どもだと思った。モチモチの実をこなにしても
ちにこね上げたもちをふかして食べてみたいなと思った。
「シーツ」と言ってくれなきゃでないと言うけど、自分
でもでるんじゃないかなと思った。

豆太はいつも後ろ向きで、モチモチの木に灯がともるの
を見れないと最初からあきらめていた。でも、あきらめな
かったら、じさまがたおれたときに、気がつかなかったか
もしれないと思った。じさまは、じぶんがはらがいたいの
に豆太に気をつかったけど、豆太は夢中で外にかけだして
いった。すごいと思った。豆太はとてもがんばったと思う。
医者さまのことをドンドンけるぐらい、豆太はあせってい
たと思う。「霜が足にかみついた」とあるけど、これも人に
たとえていると思った。

じさまのことばは本当のことだから、人にはやさしくし
ようと思った。豆太は成長したなと思った。でも、夜はこ
わいみたいだった。「じさまあ」としょんべんに行くのにじ
さまをおこすと、じさまは「やれやれ」と思っていると思
った。豆太はぜったいに勇気がある子どもだと思う。

豆太は弱虫だけどすごくやさしい

康平

豆太は、いつもは弱虫だけど、じさまが死んじゃうかも
しれないになったら、こわくても一人で医者さまをよび
に行って、すごいと思った。

父さんや母さんがいなかったら、おこる人がいなくて弱
虫になったのかなと思った。

なんで、豆太の父さんとじさまは、あぶない仕事をして
いるのかなと思った。豆太の父さんがクマにおそわれて死
んだのに、じさまはこりないでまだりょうしをやっている
のかなと思った。

モチモチの木に灯がついたのを見ると、弱虫じゃなくな
るのかなと思ったら、まだ弱虫だったから「え～っ」と思
った。じさまはなんで、豆太が夜おこしても、おこらない
のかなと思った。じさまは、なぜこんなにやさしいのかな
と思った。

子どもたちの感想から（感想の一部）

◎豆太について

沙織—豆太のじさまが死んじゃうかもしれないという気持ちには、私がおじいちゃんの手じゅつの日に思った気持ちといっしょだと思う。けど、豆太は、じさましかいないから私よりもっとじさまが死んじゃうのがいやなのかなと思った。豆太は、じさまのためならなんでもできるんだなと思った。

英輔—「大すきなじさまが死ぬより・・・」のところから、豆太は、すごくじさまがすきというのがわかった。

美緒—大好きなじさまのためなら、こわसानんかぶつとぶんだなあと思った。

光輝—ぼくのお父さんも子どものころ便所をこわがっていたそうです。お父さんとぼくは、モチモチの木の本みたいなことがあっても「気持ちがわかる」と言っていました。

美雪—じさまが死んじやいそうな時は、豆太は勇気を出したので、じさまのためなら何でもできるんだなあと思った。

俊吾—豆太はしらずしらずのうちに勇気をはっきしている。豆太は勇気がある。

里奈—表戸を体でふつとばすなんて、よっぽどじさまが大切なそんざいなんだなと思った。

百合—本当に豆太は、じさまのことが大好きなんだということがわかった。

雄太—豆太は、本当は勇気があって強い子だったんだなあ。豆太は、すこしこわがりだけど、本当のやさしさを持っている。

美月—豆太は想像力が豊かだ。

開人—豆太はじさまと二人きりでくらしているからかわいそうだ。

聡—豆太は弱虫でも、やさしいのでいい子に育つと思った。人から人気のある、やさしい子に育つと思った。

◎じさまについて

智樹—夜中に豆太に起されても、すぐ起きてくれて、じさまはとってもやさしい。

勇輔—じさまは、豆太の勇気のある行動におどろいたと思う。じさまは、喜んだだろう。

沙耶—じさまは六十四になっても岩から岩へのとびうつりなんてよくできるなと思った。

圭—なぜ山の下に村があるのに、そこ村に住まないのか不思議だ。

修貴—りょうし小屋だったら、いつけものがおそってくるかわからない。

勇氣—語り手は、じさまの気持ちになったり、豆太の気持ちになったりして、すごいと思う。

◎モチモチの木について

悠馬—モチモチの木は本当は、トチの木だったのかと思った。外は星がいっぱい出ていたのは、きれいだっただろうな。モチモチの木が光っていたのも、きれいだっただろうなと思った。じさまは、やさしそうだっただ。

百合—モチモチの木は、「おばけえ」っておどかしているんじゃないかと、上から豆太を見守っていたんだと思う。

友樹—神様のお祭りってどんなのかな。神様がくるのかな。

◎最後の三行について

歩—勇氣はあるけど、まだまだ子どもだ。

勇人—あの勇氣はなんだったんだろうか。

芳乃—最後の三行があるから、おもしろい話だと思う。

子どもたちは、豆太がじさまを助けるために、医者さまをよびに走る場面が一番感動していました。「豆太は、じさまが、大切に大好きだから、勇気を出すことができたんだ。」と書いています。しかし、「やさしさ」と「勇気」の関係や意味までは考えられていません。

また、「モチモチの木」や「山の神様のお祭り」が、自然とともに生きる豆太やじさまにとって、どういうものなのかまでは読めていません。

康平や圭のように「なぜそんな山の中で、それも危険な猟師の仕事をしているのだろう」という疑問もあります。豆太やじさまの生きている世界を読み深めた方がよかったですと思いました。

最後の三行についても、その意味までは読み取れていないので、「やさしさ」の本質を考えるためにも、読み深めたいと思いました。

五、『モチモチの木』の授業記録

一の場面 『おくびょう豆太』

T 場面ごとに題名がついているね。これを見出しといます。今までの、物語とは違うね。

書き出しの〈まったく、豆太ほどおくびょうなやつはない〉と言ってるのは、誰でしょう。

茉莉 語り手。

T この書き出しはどう思う？

乙女 この書き出しは、とっても変わっていると思う。〈まったく、豆太ほどおくびょうなやつはない〉なんて、豆太は、どれほどおくびょうなんだらうと、続きが読みたくなる。

達也 書き出しで、豆太がものすごくおくびょうだと強調している。

雄大 豆太を臆病だと、ばかにしている。

沙織 豆太よりおくびょうな人はいないと決めつけている。

奈菜 豆太ほどの〈ほど〉は、豆太のほかに誰とも比べられないようなほどおくびょうだと言っている。

T そうだね。〈ほど〉って程度を表す言葉だね。語り手は、決めつけているのね。

じゃあ、豆太はどんな子どもか、読んでいこうか。

みちる 豆太は五才。

T そのところ、語り手はなんて言ってる？

みちる 〈もう五つ〉

T 〈もう〉がついていると、どんな感じ？

みちる もう五才になったんだから、一人でせつちんにいけないとおかしいと思っている。

琴音 語り手は、五つになったら、せつちんには一人で行けてあたりまえと決めつけている。

勇人 それほど、豆太が、おくびょうだということを言いたがっている。豆太は、夜中に一人じゃせつちんにいけないほど、こわがりだとわかる。

T 次に、モチモチの木について、読んでいくよ。何か気がついたことはない？

乙女 モチモチの木を、〈かみの毛〉とか〈両手〉というふうに、人間のように言っている。

T 人間にたとえているのね。擬人化だね。他にある？

勇人 夜中は、豆太をこわがらせている。

美雪 大きな木だと思う。

均 〈つつ立っている〉からも、大きいとわかる。

茉莉 〈かみの毛をバサバサ〉から、枝が枝を伸ばして、
すごくしげっている感じがする。

T ここまで読んで、みんなは豆太のことをどう思う？

達也 やっぱりこわがりだと思う。

奈菜 でも、私も五才のとき、トイレが家の外にあるんだったら、夜中に一人でトイレに行けないと思う。だから、豆太が、こわがりだと思わない。

和大 ぼくも、一人で行くのは無理やと思う。

沙織 今やったら、電気もあって、トイレも明るいから、五才だったら行けるかもしれないけど、豆太の住んでいるところは峠の小屋だし、真っ暗だと思うから、こわくても当たり前だと思う。

翔 森の中だから、こわいと思う。

勇人 ぼくは、語り手の言う通り豆太はこわがりやと思う。せっちは、家の表にあるんやから、遠いわけやないから、一人で行けたっていいと思う。

雄太 ぼくも、豆太は、自分で行きもしないで、行けないと思込んでいるように思う。

航 ぼくは、翔の言うように、森の中に住んでいるんやから、こわくてもしょうがないと思う。

芳乃 〈一人じゃしょんべんにもいけないのだ〉の〈のだ〉からも、語り手がおくびようだと決めつけていることがわかる。

T 語り手は、〈おくびよう〉だと決めつけているけど、みんなは、分かれてきたね。
じゃあ次は、じさまについて読んでいきたいんだけど、次の人読んでくれる？

春悟 (読む)

T じさまについて、思ったことがあったら言ってください。

帆乃 じさまは、豆太がどんな小さい声で「じさまぁ。」って言ってもすぐ目を覚ましてくれるから、やさしいと思う。

百合 じさまは、昼間は猟をしたり、豆太の世話をして疲れていて、夜はぐっすり寝ていたいだろうに、豆太が「じさま。」と呼んだら、すぐ起きてくれるから、やさしいなと思う。

圭 どんなにつかれていても、豆太がどんなに小さい声で呼んでもすぐ目を覚ましてくれるから、じさまにとっては、もう習慣になってる。

T 今の圭君が言ってくれた〈習慣〉というから、ちょっと話しておきたいことがあるの。この一の場面は、過去形だ書いてある？現在形で書いてある？

C 現在形。

T 圭君が言ってくれたみたいに、いつもやっていることをあらかず時は、現在形を使うの。他のことでもいいよ。

麻奈 〈岩から岩へのとびうつり〉ができるということから、じさまは六十四才だけど、元気だと思う。

里奈 豆太をすごくかわいがっている。

和夫 豆太は、おとうが死んで、家族がじさましかいないから、豆太のことをかわいそうだと思うている。

美緒 わたしも〈たった二人でくらしている〉というのが〈二人で〉よりさびしい感じがして、かわいそうになる。〈とうげのりょうし小屋〉なんて、誰もたずねてこないだろうし・・・

航 ふとんが〈たった一まいしかない〉から、まずしいとうこともわかる。たった1まいのふとんで、二人はねてるんや。

T おとうについては？

美緒 おとうは、度胸があって勇敢だったと思う。

康平 なんで、おとうはくまと組み打ちなんかしたん？

聡樹 おとうも、じさまと同じ猟師をしていて、くまと出会って、組み打ちになったんだと思う。

T 猟師は、どんな仕事なの？

勇輔 鹿とか熊の狩りをしている。

康平 なんで、じさまもおとうも、こんな危ない仕事してるの？

※ 康平は父親がいません。初めの感想でも、なぜ豆太のおとうやじさまは、猟師のような危険な仕事をしているのか気にしていました。

航 食べていくために。

光輝 山の中に住んでいるし、この仕事しかない。

修平 たぶん、おとうはじさまにあこがれて、同じ猟師になったんじゃないかと思う。

T そうねえ。じさまもおとうも、猟師という仕事に誇りを持っていたのかもしれないね。それに、豆太たちは山の中で、厳しい暮らしをしていることもわかるね。

T 〈それなのに、どうして豆太だけが、こんなにおくびようなんだろうか〉は、どう思う？

乙女 語り手は、きもすけの子どもは、きもすけでないといけないうって決めつけている。豆太がかわいそうだと思う。

百合 私も、おとうやじさまと比べられるのは、かわいそうだと思う。

康平 みんな違うんだから、おくびようでも仕方ないと思う。

果歩 おとうは、くまに頭をぶっさかれて死んだんだし、豆太はくまがこわいんだと思う。夜、くまがおそってきたらどうしようと思ってこわいんだと思う。

圭 そうそう。だから、状況が違うから今のぼくらとは比べられない。

雄太 でも、語り手は決めつけている。先生、〈なんだろうか〉の下の傍線のことでもいい？

T そうだね、ダッシュがついているね。雄太は、ダッシュがあると、どんな感じがするの？

雄太 「あーあー」とか「もっとしっかりしろよ。」とか、後にも言葉が続きそうだし、あきれている感じがする。

T 語り手は、〈こんなにおくびようなんだろうか〉と言っているけど、みんなの話を聞いていると、豆太がこわがりでも、しかたないんじゃないかなあと揺れてくるのね。

※ この場面では、豆太やじさまの基本的な人物像について読んでいきました。子どもたちは、まだこの場面では、二人は不便な山の中に住んでいるし、食べて行くためには危険な猟師の仕事しかないというように、山での生活を肯定的なものとはとらえていませんでした。

二の場面 『やい、木い』

T 二の場面の見出しについてなんだけど、〈やい、木い〉になってるよね。これは、何からとってるの？

翔 豆太の台詞から、見出しをつけてる。

T 〈木〉に下に、小さい〈い〉がついているよ。

圭 豆太が、いばって言ってるみたい。

芳乃 豆太が、強く言ってるという感じがするのと、豆太がおさないって感じがする。なんか、かわいい。

T 今日は、まず〈モチモチの木〉について考えてみたいの。モチモチの木ってどんな木だろう。

芳乃 〈モチモチの木〉という名前は、豆太がつけた。〈豆太がつけた名前だ。〉の〈だ〉でそのことを強調している。

T そのことで、どう思うの？

芳乃 豆太にとって、親しいというか、身近な木という感じがする。

修平 豆太の小屋のすぐ前に立っている。

帆乃 〈でっかいでっかい〉が二回繰り返されているから、すごく大きな木だとわかる。

沙織 秋になると、茶色いぴかぴか光った実を、いっぱいふりおとしてくれる。

均 〈ふりおとしてくれる〉が擬人化されてる。

T 擬人化されているとどんな感じがするの？

均 豆太にとって、モチモチの木が恵みの木というか、ありがたい木だという感じがしてくる。

茉莉 〈ふりおとしてくれる〉だと、たくさんおとしてくれるって感じがする。

T そうね。その実で、じさまがもちを作ってくれるんだね。その作り方を、読んで。

息吹 (読む)

T この作り方を読んでどう思う？

歩 木うすについて、石うすでひいて粉にするだから時間がかかる。

T そう、その前に、実を何日も水につけて、あくぬきもしないといけないのよ。

雄太 〈こね上げる〉やから、うんこらしよって力もいる。

勇輔 豆太のために、そんなことまでしてくれる。

和夫 うまいやろなあ。

恵美 〈ほっぺたが落ちこちるほどうまい〉なんて、食べてみたい。

T そうだね。じゃあ次に豆太から見た昼と夜のモチモチ木のイメージをくらべてみたいと思います。

一樹 昼は、〈ぴかぴか〉だから、明るいイメージ。

均 実をいっぱいくれるから、自然の恵みって感じ。

開人 言い換えると、豊かなイメージ。

T じゃあ、夜は？一樹君が、〈ぴかぴか〉って声喩から言ってくれたから、夜の声喩はなにかな？

勇人 〈バサバサ〉

和夫 なんか、不気味。

翔 こわいイメージ。

T じゃあ、昼と夜の豆太は？

歩 昼の豆太は、いばっている。

麻奈 えらそう。

英輔 元気。

高貴 夜は、こわがり。

悠馬 おくびよう。しょんべんなんか出なくなっちゃうくらい。

翔 昼と夜ではまったく違う。まるで二重人格。

勇輔 モチモチの木もそうだけど、豆太も昼と夜が対比になっている。

T じゃあ、〈じさまが、しゃがんだひざの中に〉から読んでくれる。

恵美 (読む)

T ここを読んでどう思う？

航 ひざの中っていいなあ。大事にされてるって感じがする。

勇人 ぼくも、〈しゃがんだひざの中に豆太をかかえて〉から、じさまのひざの中にかかえてもらったら、あったかいし、豆太は安心するだろうなと思う。

和大 じさまは、豆太が大好きだから、しゃがんでひざの中に入れてる。

芳乃 じさまは、「ああ、いい夜だ。・・・」から、豆太が、こわがっているから、豆太にとって怖い鹿や熊がねてるよって安心させている。

息吹 一の場面から、もちを作ってくれるところと、このおしっこをさせるところまで、ずっとじさまのやさしさがくりかえされている。

悠馬 でも、語り手は〈みっともないやなあ〉と言って、まだ、豆太のことをおくびようだと言っている。

※ 「モチモチの木」が実を落としてくれるということから、恵みをもたらしてくれるんだというように、初めの感想ではなかった自然の豊かさということに気づいていきました。しかし、「モチモチの木」の昼と夜の姿から連想できる自然の「豊かさ」と「厳しさ」という二つの面の押さえができませんでした。

※ じさまがひざの中に抱え込んでくれることに、子どもたちは感動していますが、こういう経験がすくないのかなあと感じました。

三の場面 『霜月二十日のぼん』

T 三の場面は〈霜月二十日のぼん〉って、見出しになっているんだけど、この見出しどんな感じがする？

均 後で、なんかおこりそうな感じがする。

航 特別な日なんかなと思う。

T もう一つ、三の場面は、一や二の場面と表現が違うところがあるんだけどわかる？

沙耶 一や二の場面は現在形で、三の場面は、過去形。

T そうだね、よく気がついたね。三の場面から基本的に過去形で書かれているのね。過去形で書かれているということは？

雄太 一や二の場面は、いつもいつもあることで、三の場面は、一回きりということかな？

T そうだよ。豆太にとっては、一回きりのことなのね。でも、時々現在形もまじってくるから気をつけてね。

均 書き出しも、〈そのモチモチの木〉の〈その〉って、指示語から始まっているから、なんか特別のことがおこりそうな気がする。

T そうだね、指示語から始まっているのね。

じゃあ、じさまの台詞読んでくれる？

由紀 (読む)

T このじさまの台詞を聞いてどう思う？

一樹 〈モチモチの木に灯がともる〉なんて、不思議なことが起きるんやなあと思った。

和大 なんで〈火〉じゃなくて、わざわざ〈灯〉って書いてあるのかな。

春悟 〈火〉だと、ぼわっと燃えてる火で、〈灯〉だと明かりがついてるってことだと思う。

雄太 〈火〉だとべつにきれいな感じがしないけど、ぼくも、春悟が言ったみたいに、〈灯〉の方はなんかきれいな感じがする。

圭 〈火〉だと自然につくって感じだけど、〈灯〉だと、だれかが〈灯〉をつけるって感じがする。

里奈 それに、〈灯がともる〉だとぼわっとともる感じで、〈灯がつく〉だとパッと明るくつく感じ。〈灯がともる〉のほうが、不思議な感じがして、それにきれいな感じもする。

T じさまの台詞について、他にある？

美緒 じさまは、豆太に見てほしくてこんなことを言ったと思う。

和太 じさまも、死んだおとうも見たと言って、豆太に見させようとしている。

芳乃 豆太に、豆太にも勇気があるんだよって、自信を持たせたいと思っていると思う。

恵美 〈山の神様のお祭り〉っていうことは、海や川にも神様がいてってこと？

里奈 そうやと思う。それで、〈山の神様のお祭り〉っていうのは、山で生きる子にしか見られないお祭りだと思う。

百合 私も、じさまの台詞を聞くと、豆太の家は獵師だし、豆太の家の人はずっとモチモチの木に灯がともるのを見なくちゃいけないのかなと思えてくる。

沙織 じさまが子どものころに見たのに、しっかり覚えているっていうことは、灯がついたモチモチの木がそれほど印象的だったってこと。山の子にしか見られないのかもしれないけど、私も見てみたいと思った。

T 豆太の方はどうだろう？

麻奈 ダッシュのところだけどいい？

T いいよ。

麻奈 ダッシュのところに、「おらは、ぜったいだめだ。」って言葉が入ると思う。

T そんな感じで、豆太の台詞を読んでくれる。

麻奈 「それじゃあ、おらは、とってだめだ。」

T 〈豆太は・・・〉からも、読んでくれる？

里奈 (読む)

T ここ読んでどう思う？

隆介 〈じさまもおとうも見たんなら〉というところで、じさまもおとうも勇気があったことがわかる。

航 〈勇気のある子どもだけだ。〉で、もう自分は絶対にだめだと思ったんだと思う。

智樹 〈ぶるぶる〉から、こわいんだなあわかる。

沙耶 〈夜なんて考えただけでも、おしっこもらしちまいそうだな。〉から、本当にこわがっているのがわかる。

恵美 冬の夜中だから、寒いということもわかる。

T 冬の真夜中だもんね。二つの意味があるだろうね。

里奈 〈まるでそれは、ゆめみてえにきれいなんだが〉というところから、じさまが言った〈神様のお祭り〉って言うのがわかる気がする。それほど、きれいなんだらうなと思う。

T そうかあ、山の神様のお祭りかあ。さっき里奈ちゃんや百合ちゃんも〈山で生きる獵師の子は見ないといけない〉と言ってたね。

茉莉 見られたと言うことは、その子が勇気のある子どもだってこと。

勇馬 勇気のある子は、りっぱな獵師になれる。

歩 りっぱな獵師になれたら、山でちゃんと生きていけるってこと。

航 だから、じさまは、神様のお祭りをみてほしいんか・・・

T でも、豆太はどう思ったの？

帆乃 昼間だったら、見たいなあと思った。

聡貴 ぼくも、そんなにきれいなんなら、見てみたい。

里奈 でも、豆太は、こわいから、あきらめている。

※ 子どもたちは「山の神様のお祭り」にこだわりはじめました。山で生きるということに対するイメージが変わってきました。自然とは不思議で美しいものだというように、深まっていたように思いました。

四の場面 『豆太は見た』前半

T まず、見出しね。どんなことを思った？

美雪 〈豆太は見た〉という見出しだから、何を見たのかなと思うし、何か起こりそうな気がしてくる。

雄太 ここまで来ると、豆太が〈モチモチの木に灯がともる〉のを見たんだらうなと思うけど、〈豆太も見た〉ではなくて〈豆太は見た〉になっているから、〈とうとう豆太は見たんだ〉って語り手が強調しているんだと思った。

T 書き出しはどう？

和太 〈くまのうなり声が聞こえた〉というところから、豆太は一瞬くまが家の中にいるのかと思ったと思う。びっくりしたと思う。

修平 くまの〈鳴き声〉じゃなくて〈うなり声〉だから、こわかったと思う。おなかをすかせたくまが、おそってきたのかと思ったと思う。

友樹 豆太は、くまのうなり声を聞いたことがあるのかな。おとうを殺したのは、くまだったからこわかったと思う。

歩 こわくてじさまにしがみつこうとした。

恵美 一枚のふとんでとなりにはいるはずのじさまがいないから、またびっくりしたと思う。

T じさまは、どうしていたの？

光輝 じさまは、はらがいたくてくるしんでいた。(くまみたいに体を丸めてうなっていた。)

康平 じさまの台詞からも、わかる。(ま、豆太)とか(じさまは、じさまは)からも、苦しんでいるのがわかる。

T じさまの台詞を聞いて他に思ったことある？

勇馬 じさまは、〈ちょっとはらがいてえだけだ。〉っていているけど、ぜんぜんそんな感じじゃない。

一樹 じさまは、本当におなかが痛いのに、豆太に心配かけないでおこうと思ってこんなことを言っている。

果歩 ここでも豆太はじさまがくまみたいに体を丸めてって見えるから、豆太はよっぽどくまのことを気にしていることがわかる。こわいくまが、からだを丸めているように見えたんだから、豆太にとってたいへんなことがおこったんだと思ったことがつたわってくる。

T それで、豆太は「じさまっ。」って言ってとびついたらよね。

勇人 でも、じさまは、ころりとたたみに転がった。
聡貴 歯をくいしばって、ますますすごくなった。
美緒 歯をくいしばるから、すごく痛いことがわかる。
勇輔 すごく苦しんでいる。
沙耶 でも、がまんしている。

T 豆太の最初の「じさまあっ。」とここの「じさまっ。」
とくらべてみてどう？

C 違う。

T どう違うの？

みちる 「じさまあっ。」の方は、こわくてじさまに「たす
けて。」って助けを求めている感じで、「じさまっ。」の
方は、心配していそいでる感じ。

いぶき 「じさまあっ。」の方は、甘えてる感じで、「じさま
っ。」の方は、「じさま、どうしたのっ？」って心配
している感じ。

達也 「じさまあっ。」の方は、声が小さくて、「じさま
っ。」の方は、声が大きい感じがする。

修貴 「じさまっ。」の方は、焦ってる感じがする。

芳乃 「じさまあっ。」の方は、こわいだけで、「じさま
っ。」の方は、びっくりして必死で言ってる。

雄太 「じさまあっ。」の方は、しょんべんでじさまを起
す時も「じさまあ。」って小さい〈あ〉がついている
のといっしょやから、こわがっているのはいっしょ。
じさまに甘えてるのがわかる。でも「じさまっ。」と
いうのは、初めてでてきた。必死なのがわかる。

T じゃあ、そういう感じで読んでもらおうかな。地の
文を読む人、じさま、豆太にわかれて読んでくれる？
(三人が読む)

違いがよくわかったね。

それで、豆太はどうしようと思ったの？

勇輔 じさまを助けようと思った。

C 「医者様をよばなくっちゃ。」

T 焦って必死な感じで豆太の台詞を、だれか読んで。

奈菜 「医者様をよばなくっちゃ。」

T 助けに行く様子を、次の人読んで。

美月 (読む)

T ここを読んで、どう思う？

百合 〈ねまきのまんま〉から、それだけ急いでいるっ
てわかる。

康介 ふつうだったら、戸は手で開けるし、表に出るの
ならはきものはくけど、表戸をふっとばして、は
だしで走り出すなんて、それほど、豆太はじさまが
好きなんだなあとわかる。

芳乃 〈ねまきのまんま〉とか〈はだし〉でから、豆太
の必死な思いがわかる。

T 次に、豆太が走っている外の様子は、どんなんだろ
う。次の人、読んでくれる。

恵美 (読む)

※ 黒板に茶色のチョークで坂道を書き、その上に白いチ
ョークで白い線を書く。

航 あっ、霜や。

芳乃 〈外はすごい星で、月も出ていた。〉から、それだけ
暗いことがわかる。

茉莉 空気がきれいで、それだけ寒いこともわかる。

康平 〈一面の真っ白い霜〉からも、寒いということがわ
かる。

和太 〈霜が足にかみついた。〉で、霜が擬人化されてる。

T 和君、それでどう思う？

和太 〈霜がささった〉より、〈かみついた〉の方が痛そう。

琴音 〈足からは血が出た。〉も、痛そう。

智樹 血が出ていても、頭の中はじさまもことでいっぱい
だから気にしていない。でも、いたそうだと思う。

T そうだね、だから、〈いたくて、寒くて、こわかった
からなあ。〉って書いてあるよね。

雄太 この時の〈こわい〉は、あれほど豆太は夜をこわが
っていたから、〈外が暗いのがこわい〉のこわい。

圭 語り手の言い方が、変わってきている。豆太に同情
している。豆太ことを応援してるみたい。

T そうだね、もう一度、〈豆太は小犬みたいに〉から、
ここまで誰か読んでくれるかな？

麻奈 (読む)

T でも、豆太が一番こわいのは？

果歩 大好きなじさまが死んでしまうこと。

T そうだね、ここの豆太はどんなことを考えながら走
っていたんだろう。

美月 「じさま、死なないで。」って思ってる。

里奈 自分のことは考えずに、じさまのことだけを考えて
走っている。「じさまを助けたい。」という思いでい
っぱいだったと思う。

茉莉 〈半道もあるふもとむらまで〉の〈も〉と〈まで〉
から、村まですごく遠いことがわかる。「世界一大切
なじさまを助けたい。」と思いながら走ったと思う。

百合 月も星も、豆太のこと応援してるんじゃないかな。
私たちも応援したくなる。

航 ぼくも、〈血が出た〉のところで涙がでそうになった。

※ 雄太が「この時の〈こわい〉は、あれほど豆太は夜を
こわがっていたから、〈外が暗いのがこわい〉のこわい。」
と言ってくれたので、「一番こわいのは？」と聞くことが
できました。里奈が「じさまを助けたいという思いでい
っぱいだったと思う。」と言っているように、豆太の必死
の思いは子どもたちには伝わったようです。語り手も、
自分たち読者も、思わず豆太を応援してしまう場面です。

四の場面 後半

T 年よりじさまの医者様の「おう、おうー。」のダッシ
ュには、どんな言葉が入ると思う？

和馬 「そうか、そうか。」

芳乃 「それは、たいへんだ。」

航 「今から、すぐ行こう。」

翔 「よく来たなあ。」

友樹 昔は、医者様が、家に来てくれていたの？

T そうだよ。往診って言って、先生も来てもらったこ
とあるよ。

勇馬 年よりじさまの医者様で大丈夫かな？

達也 ふもとの村には、この医者様しかいないんやっ。

沙耶 でも、昔から、じさまのこと知っているから、大丈
夫やっ。

雄太 豆太は、ちゃんとじさまの様子を話せたんやなあ。
ぼくなら、パニックになってうまく話せないかもしれ
ない。この医者様、やさしいな。真夜中やのに、
すぐたのみを聞いてくれて。

T その医者様が、じさまの小屋へ上って来てくれるだ
けど、〈えっちら、おっちら〉ってどんな感じ？

恵美 ゆっくりな感じ。

沙織 やっぱり年よりだなあ。

一樹 なんかふらふらしてる感じや。
英輔 もうちょっと、急いでほしいなあ。
春悟 でも、豆太をおんぶしているから仕方ない。重そうや。
和大 豆太をおぶうなんて元気やと思うわ。そうや、がんばってるやん。
康平 医者様は血が出ている豆太の足を見てすぐおぶってくれたんやろなあ。
T 〈とちゅうで、月が出てるのに、雪がふり始めた。〉のを、豆太はねんねこぼんてんの中から見たのね。〈医者様のこしを、足でドンドンけとばした。〉のところでは、どう？
勇馬 じさまがなんだか死んでしまいそうな気がした。
美雪 だから、豆太は、焦っている。「いそいで。」って感じでけとばしている。
沙耶 豆太は医者様のところについて、ちょっとほっとしたけど、医者様がえっちらおっちら上って行くから、じさまのことが心配になって、ドンドンけとばした。
乙女 じさまのことが大好きだから、急いでほしいから。
均 じさまの様子が早く知りたい。
雄太 じさまのことを心配してるのに、医者様がえっちらおっちら行くから、「早く行って」って感じでけとばしている。
茉莉 でも、豆太にはゆっくりに思えるけど、医者様はがんばって上っていると思う。
百合 医者様は、けられても、豆太の気持がわかるから、おこらない。

T 次のところ、次の人読んでくれる？

英輔 (読む)
康平 〈もう一つふじぎなものを見た。〉って書いてあるけど、一つ目は何？
勇人 〈月が出てるのに、雪がふり始めた。〉や。
康平 ああそうかあ。

T 次のところは？

駆 「モチモチの木に、灯がついている。」と豆太は言うてるのに、医者様は「まるで、灯がついたようだ。」って言うてる。
雄太 〈けれど〉って逆接の接続詞になってる。医者様は豆太が言ったことを打ち消している。
均 医者様の〈まるで〉は、たとえるときに使うから、灯がついたように見えるだけだと思っている。
歩 〈灯がついている〉は、本当に灯がついているって見えてて、ひとちゃんが言ったように〈灯がついたようだ〉は灯がついているように見えるだけだと言ってる。
達也 〈灯がついている〉だったら、灯がついてると信じている感じがして、〈灯がついているようだ〉は灯がついているとは信じてない。つまり、神様のお祭りとは思ってなくて、ただの自然現象だと思っている。
翔 医者様は、現実的やなあと思う。
勇人 医者様は〈あれは、とちの木の後ろにちょうど月が出てきて、えだの間に星が光ってるんだべ。そこに雪がふっているから、明かりがついたように見えるんだべ。〉と理由をちゃんと言ってる。さっきまでの〈外はすごい星〉でとか〈月が出てるの、雪がふり始めた。〉というのが全部重なってこういう現象がおきたんや。
由紀 山の神様のお祭りを、豆太だけが見れるのはわかる。だって、じさまが「一人の子どもしかみることができ

きねえ。」って言うてるから。でも、どうして医者さまにも、見えるの？

春悟 じさまは「一人の子どもしかみることができねえ。」って言うてるけど、本当はだれにでも見えるんかなあ。
芳乃 本当はだれにでも見えるんだけど、じさまは豆太に本当は勇気のある子どもなんだと思わせようと思ってるからこういうことを言った。
圭 じゃあ、じさまは、豆太をだましたん？
芳乃 だましたって言うか、豆太に自信を持たせたくて、いったんだと思う。
均 医者様は〈灯がついた〉とは見ていなくて、ただの自然現象だと思っている。でも、豆太は〈神様のお祭り〉だとじさまから聞いていて、〈神様のお祭り〉だと思っていて、同じものを見ても、意味が違う。
T そうかあ、同じものを見ても、人によって意味づけ方がちがっていることがあるんだね。そうやって、医者様は、さっさと小屋の中に入ってしまっただね。そこからの豆太のことをどう思う？
航 今先生が言った〈小屋へ入ってしまった。〉って書いてあるのは、本当はすごいことがおこったんだから、ゆっくり見たいけど、豆太も医者様もじさまのことを助けたいから、ゆっくり見ていない。
沙織 今はじさまのことが心配で、どんなにきれいなものでも、忘れてしまうんだ。
乙女 豆太は、医者様の手伝いをしている。豆太は足から血が出て痛かったらろうけど、必死に手伝いをしている。じさまのためだったら、なんでもできるんだなあと思った。
達也 豆太は手伝いをしている時も、じさまのことを心配しているだろうな。
恵美 豆太はじさまのために、自分にできるせいっぱいのことをしている。

※ 私は最初由紀の「でも、どうして医者様にも、見えるの？」という発言を聞いた時、考えてもみななかったので一瞬とまどいました。しかし、均が、見る人によって意味づけ方がちがうのだと説明してくれました。他の子どもたちも、均の意見に納得したようでした。しかし、目標にもかかわる大事なことなので、もっとしっかり押さえる必要があったと思いました。

五の場面 『弱虫でも、やさしけりゃ』

T 五の場面の見出しについて何か思ったことある？
由紀 〈弱虫でも、やさしけりゃ〉は、じさまの台詞からとっている。
雄太 〈弱虫でも、やさしけりゃ〉の〈でも〉が逆接の接続詞になっているから、〈やさしけりゃ〉が強調されている。
航 書き出しも、〈でも〉から始まっている。
T そうだね、書き出しの〈でも〉は、何をひっくりかえしているんだろう。
達也 じさまは、医者様がモチモチの木に〈灯がともったようだ〉〈明かりがついたように見えるんだべ。〉と言ったことを受けて、〈でも〉違うんだよって言いたいから。そして、じさまが言うことを強調しようとしている。
奈菜 じさまは〈灯がついたんだ〉って言うてる。

駆 豆太が言った〈灯がついている〉とも違うなあ。
奈菜 〈灯がついている〉は、いつのまにかついたって感じで、〈灯がついたようだ〉は、ついたように見えるだけで本当はついていなくて、じさまが言ってる〈灯がついたんだ〉は、豆太が灯をつけたんだと言ってのように思えてくる。

航 三人とも言ってることが違うなあ。
芳乃 じさまは、自信を持って言ってる。
均 じさまは、〈灯がついたんだ〉って断定している。
圭 じさまは、豆太に勇気があるってことを教えたかった。

隆介 じさまは、豆太に自信をつけたかった。
雄太 医者様は、モチモチの木に灯がついたのがただの自然現象だったと言っていて、そのままだと、それを豆太が偶然見たということになってしまうから、豆太もそう思い込んでいるかもしれないから、豆太に勇気のある子どもやと思わせたいからこんなことを言った。

息吹 私も、豆太に教えてあげているんだと思う。
由紀 言い聞かせている。
隆介 豆太のしたことを、意味づけている。

T **そうだね。意味づけているんだね。次の、じさまの（人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きっとやるもんだ。）を聞いて、みんなはどう思う？**

乙女 じさまもおとうも、子どものころに見たんなら、勇気のあるこどもだったんだ。

恵美 じさまもやるべきことやってきたんだと思う。
達也 人間にとって、一番大切なものはやさしさなのかなと思った。

悠馬 やさしさは勇気の元なのかなと思った。
隆介 豆太はやさしさがあったから、勇気が出せたんやと思った。

乙女 豆太はじさまが大好きで、その大好きなじさまが病気になるっちゃったから、助けようとした。大好きだからあんな力が出せた。

英輔 じさまは最初に〈おまえは、山の神様の祭りをみたんだ。〉って言ってるやろ。なんで、〈木の神様〉じゃなくて、〈山の神様〉なんやろ。

達也 ぼくも〈山の神様の祭りをみる〉っていうのは、どういう意味なんやろうと思った。

T **三の場面で、里奈ちゃんがたしか〈山の神様の祭り〉のこと言ってたね。なんて言ってたかな？**

里奈 〈山の神様のお祭り〉は、山に生きる子どもしか見れないお祭り。

達也 じゃあ、〈山の神様の祭りをみる〉っていうのは、山で生きていけるということなんや。だから、英ちゃん、〈木の神様〉やったらあかんのや。

英輔 そうかあ。
和大 〈山の神様〉っていうと、山に生かされているって感じがしてくる。だから、山そのものが大切。

T **そうだね。〈山〉っていうと、自然の中で、自然と共に生きるって感じがしてくるね。最後の三行にいかがか。**

茉莉 〈それでも、豆太は〉の〈それでも〉が、逆接になっている。

圭 この話は、ほんとに逆接が多いな。それが、大切な役目をしている。

里奈 最後の文章がなかったら、〈豆太は弱虫な子どもだっ

たけど、勇気がある子どもになった〉というだけの話になっちゃう。最後の三行があるからおもしろい。

みちる 私も、この終わり方がいいと思う。

光輝 豆太はまだ五才やのに、まだ小さいのに、二キロメートルもある山の坂道を走っていたのに、最後の〈それでも豆太は〜〉の三行は、わらけた。

友樹 〈じさまが元気になると〉って書いてあるから、じさまが元気じゃなかった時は一人で行けてたんかな？

達也 じさまが、こんなことになったんは初めてなんっちゃう。

雄太 このダッシュも意味があるんっちゃうかな。
T **どんな？**

雄太 めでだしめでたし、「うう〜んそれでも」って感じ。
T **「うう〜んそれでも」？**

沙織 じさまのためなら、勇気が出せるけど、やっぱり夜はこわいから。

みちる じさまがたいへんな時には、なんでもできる。
翔 大事な時には、力が出せる。

圭 うう〜んそれでも、豆太は弱虫にもどったの？
康平 弱虫にもどったんじゃないくて、前の弱虫の豆太でも、

じさまがたいへんなときには、医者様を呼びに行けたと思うから、一の場面の豆太も五の場面の豆太も変わっていないと思う。

沙耶 圭君とも村田君（康平）ともちょっと違う。豆太は、四の場面で、灯がついたのを見て、じさまに勇気のある子どもだったんだといわれて、自分にも勇気があるってわかったから、一の場面の豆太とは違っている。

雄太 〈霜月二十日の晩〉で、豆太は「一それじゃあ、おらは、とつてもだめだー。」ってあきらめていたけど、〈豆太は見た〉のところで勇気を出して、灯がついたのを見たから、心の中には自信を持ったと思う。

芳乃 三の場面までの豆太は勇気がなかったけど、じさまが苦しんでいる時に本当の勇気が出せた。

航 豆太にとって、特別の時やから、勇気が出せた。普通のときやったら、勇気は出せへん。

雄太 ぼくも同じやと思う。豆太は変わってないわ。〈おくびょう豆太〉の時も「じさまあ。」やし、最後の場面も「じさまあ。」で小さい〈あ〉がいつしよや。〈豆太は見た〉では「じさまっ。」って小さい〈っ〉になっている。

修平 でも、雄太、心の中に勇気が持ってたって言ってたやろ。勇気が出せたのは、じさまの力やと思う。力っていうか、これまでじさまが一生懸命豆太を育ててきたから豆太は大事なじさまを助けようとした。だから、豆太自身は気がついてないけど、前の豆太とは違っていると思う。

春悟 じさまが、豆太の行動を「やさしささえあれば、なんでもできるんだよ。」と意味づけた。

達也 いいやん、いいやん。また、じさまを起すなんて、この方が豆太らしいやん。

茉莉 語り手は、最初は〈豆太ほどおくびょうなやつはない。〉と決めつけていたけど、語り手も読者みたいに、弱虫でもやさしけりゃいいと気がついたのかもしれない。豆太はやっぱ豆太。やさしさとおくびょうさと両方持つてる。

美緒 私もそう思う。これで、いいって。このままの豆太でいいと思う。

奈菜 じさまも、そう思っていると思う。

勇人 豆太はやんなきゃいけないときには、きっとやるってわかったから。

雄大 豆太は自分のことやったら人にたよらなできひのやけど、人のためやったら心の中に小さくひそんでいる勇気があふれ出してくる。人のためにはできる。

均 ぼくも、ふだんは勇気があるなんて見えなくてもいいだと思ふ。やさしさがあれば、やらなきゃいけないときにはできるから。

圭 そうというのが、ほんとうのやさしさかあ。

美雪 豆太には、またしょんべんについていってくれるやさしいじさまがいていいなあ。じさまも、自分がしんどい時に、一人で医者様を呼びに行ってくれる豆太がいていいなあと思う。

沙織 最初読んだ時は〈やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きっとやるもんだ。〉ってほんとうかなと思ってたけど、みんなと読んでいったら、本当にそうなんだと思えてきた。強くたって、やさしさがなきゃ、ただいばっているだけの人だもん。

T 「やさしさ」と「勇気」についての関係についても考えられたね。「モチモチの木」に灯がつくという意味も考えることができたね。先生も、みんなと読んでいろいろ考えさせられたよ。ありがとう。

五、終わりの感想

ほんとうのやさしさを教えている

芳乃

“豆太は見た”という見出しを読んで、何か起こりそうな気がした。これもしかかかなと思った。

(ひょっと目をさました。)の(ひょっと)は、びっくりした感じがする。頭の上で、くまのうなり声が出たら、すごくびっくりしたんだろうなあ。この時の「じさまあつ」は、少しあせているが、まだじさまに甘えている感じだ。じさまが、いないことがわかった時、豆太はびっくりしたんだろうなあと思う。

「ま、豆太、心配すんな。じさまは、じさまは」と言うところから、じさまは、がんばって言っているみたいだと思った。この時じさまは、豆太に心配してほしくなかったんだと思った。「ちょっとはらがいてえだけだ。」と言っているけど、豆太はもうその言葉ではらはらしていたと思う。〈くまみたい〉にと、くまにたとえているけど、これは豆太が思ったことだと思ふから、やっぱりくまがこわいのだろう。

次の「じさまあつ」から、すごいそいでいてこわくてびっくりして、すぐには何をすればいいのかわからなかったのだと思った。

「医者さまをよばなくっちゃ。」から、どうしてもじさまをたすけたいという気持ちがわかる。苦しんでうなっているじさまを見て、とつぜん思いついたんだと思った。

(子犬みたいに)のところもたとえだと思った。(体を丸めて)のところは「よいい。どん。」の「よいい」のかっこうみたいな感じだと思った。表戸を体でふつとばすくらい必死だったんだなと思った。

こういうとき、勇気が自然に出てくると思った。

(ねまきのまんま。はだしで。)のところ、「、」のはずなのに、「。」になっている。ここからもうそいでいるのがわかる。半道走るなんて、すごいなあと思った。でも、大すきなじさまの死んでしまうほうがもっとこわいから、(そうしなくっちゃだめなんだ)と思ったと思ふ。

それから、医者さまと帰るとき、足で医者さまをどんどんけとばしたなんて、じさまがしんぱいでこわかったんだなと思った。

豆太がモチモチの木に灯がついているのを見たとき、豆太は「灯がついている」と言って、じさまが言っていた「山の神様の祭り」の灯だと思っている。だけど、医者さまは自然げんしょうだと知っているから、医者さまは「灯がついたようだ」と言っている。次の日、じさまは、豆太に「灯がついたんだ」と言っていて、豆太に自信をつけようとしていると思ふ。

弱虫はだらしなない感じがするけど、でもじさまの話では、ぎやくせつになっているから、弱虫がだめだとはあまり思えない。

「人間やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きっとやるもんだ。」のところは、やさしかったら、だれかがたいへんなときに、一番しなければいけないことができるんだと言っているんだと思ふ。

最後の三行があるから、人間のほんとうのやさしさを教えていると思ふ。すごい話だと思ふ。

ほんとうの勇気はやさしさの中にあると思ふ。

※ 芳乃は、二年生の時に、時間割もないという独自の考え方で教育を行う私立の学校から転校してきました。芳乃も芳乃の母親も公立学校になじめずにいました。しかし、文学の授業は大好きで、授業中もよく発言していました。

やさしさは勇気のもと

悠馬

書き出しが(まったく、豆太ほどおくびょうなやつはない。)だった。ふつうむかし話は(むかし、じさまと豆太がおったそうじゃ)とかで始まるから、この書き出しはびっくりした。

じさまもおとうもりょうしだった。モチモチの木は、豆太がつけた名前なのかと思った。実を(ふり落としてくれる)だったら、モチモチの木が、わざと落としてくれる感じがする。

(霜月二十のぼん)という見出しを読んだら、何かおこるような感じがする。じさまもおとうも、モチモチの木に灯がともったのを見たんだなと思った。初読のとき、豆太は「それじゃあ、おらはとつてもだめだ。」と言っているけど、けっきょうくは見ることになりそうだなと思った。

(豆太は見た)の場面の「じさまあつ」はこわい感じで、「じさまあつ」はどうしようという感じでちょっとちがった。

豆太は、今までは、後ろ向きだったけど、この場面では、前向きだった。じさまをたすけるため、いそいで医者さまをよびにいった。豆太は、じさまが死んじゃうかもしれないと思ふて夜道を走った。

豆太はモチモチの木の灯を見たとき、「モチモチの木に灯がついた。」と言った。医者さまは、「灯がついたようだ。」と言った。

豆太は、勇気を出していた。やさしさは、勇気のもとなんだなと思った。人間はやさしさが、一番大事。豆太は、最後はじさまの言葉で、心の中に自信をもった。でも、次の夜には、しょんべんの時じさまを起した。でも、じさまは、豆太には、やさしさがあるからいいと思ふていると思ふ。

※ 悠馬は、引っ込み思案な性格で、学校ではほとんど話をしません。「モチモチの木」には、感動したようです。

豆太は、じさまみたいなさごいりょうしになれる

友樹

(豆太は見た)の場面から、豆太はじさまをたすけに行くんだなと思った。豆太が、がんばったから、じさまは死なずにすんだんだなと思った。豆太は、弱虫だけど、がんばって医者さまのところ行けたんだなあとと思った。豆太はすごいと思った。

医者さまは、豆太のしんぱいは一回もしていなかったなと思った。豆太はなっていたのに、医者さまは、なんにも言わないで、そのままふつうに行ったのかなと思った。

豆太が、モチモチの木の灯を見たとき、びっくりしただろうと思った。

豆太は、だいじなときに勇気を出せたから、またいろんなことで勇気を出せると思った。

豆太も、いつかじさまみたいなさごいりょうしに、ぜったいなれると思った。

『モチモチの木』でやさしいほうがいいことをおぼえた。人間にとって一番大事なのは、やさしさなんだなと思った。

※ 友樹は、最初の授業のころはやはり「クレヨンしんちゃん言葉でしたが、だんだん普通に話せるようになってきました。感想も、友樹なりに素直に書いています。

六、授業を終えて

三年生と共同で教材研究をし、全授業の発問も考えましたが、発達段階の違いもあるし、みんなで考えた授業の流れは大事にしながら、四先生は四年生の授業をしてもよいということになりました。

最初は、私も気をつけてみんなで考えた発問をしようとしていましたが、後半は、私のいつもの「どう思う?」「何か思ったことはない?」などと問う授業になってしまいました。子どもたちが出した問いで授業が進んで行くこともあり、あまり研究授業の参考にはならなかったのではと反省しています。

学年の初めに、詩教材などを使って、対比されていることや繰り返し、書き出しや文末表現、比喩や声喩、接続詞や助詞の使い方などに注意して、どう表現されているか、それらがどういう意味を持つかを学習してきました。それもあって、少々理屈っぽい読みになっているのではないかとということも気なっています。

子どもたちは、私が「終わりの感想を書くよ。」と言うと、「えっ、もう終わるの?」と不満げでした。子どもたちは、体育で駅伝をした時でも、走っている子に、

「豆太、がんばれ。」

「医者様、がんばれ。」

と声援を送るなど、『モチモチの木』が大好きになりました。

斉藤隆介は、ある子どもから来た手紙の返事にこう書いています。

『表紙に、「父母へおくる童話集」って書いてあるのは、ぼくは、自分の童話をおとなにも読んでもらいたいからなんだ。おとなはね、だんだん年をとるとね、世の中に負けてしまうことがあるんだ。汚れたり、負けちまいそうなおとなが、ぼくの童話を読んで元気になってほしい、

と思ったんだよ。

「お子様用」に書いたおはなし、なんて、ニセ物だ、ってぼくは思うんだ。「お子様ランチ」なんて、みみっちくてうまかあないやね。子どもだって、おとなとおんなじおすしや、ちゃんとしたチャーハンを食べたいやね。

題にした「ペロ出しチョンマ」の主人公、長松の住んでいた花和村という村は、いくら千葉県地図を見てもありません。まつたの本神社というものもありません。そういう名の人形も売っていませんから、送ってあげられませんよ。お金は返します。あれは、ぼくが作った話だからです。ないことが、まるであったように思えたら、ほんとにあったことよりももっとほんとにナンじゃないかしら。

あれは、ぼくが四年まえに千葉へ越してきた時、みんなのためにハリツケになって殺された佐倉宗五郎とその子どものことを考えて作ったんだ。

佐倉宗五郎も、架空の人物である、なんて研究を発表している学者もあるんだよ。それでも宗五郎は、今でも「宗五様」って呼ばれて、物語になったり芝居になったりしてみんなの胸にほんとの人よりほんとに生きてる。なぜそうだろうか君も考えてくれないか。

「八郎が村人のために高波を防いで八郎瀉に沈んだことが大切だ」っていうのは確かにほんとうだ。けどね、ただそれだけじゃ「お修身」だけ。小鳥の鳴き声が美しいと思い、その小鳥を髪の中に住まわせてやって朝もソーッと起きる八郎をやさしい大男だなあ、と感じ、その八郎がみんなのために死ぬからグッとくるんだよ。

「お修身」や「道徳」でなく、美しさや喜びを感じて、魂の底からほんとうにみんなのために働いたり、たたかたりできるようになるのが、ぼくはほんとだと思うんだ。』
児童文学別冊「児童文学読本」(すばる書房)

やはり「みんなのために死ぬからグッとくる」というところには、共感できませんが、大切なところ(主題)だけを取り出して読んでは「お修身」になってしまうというところは本当だと思います。

「モチモチの木」でも、灯がついたモチモチの木を美しいと感じたり、じさまのために夜道を一人で走る豆太に感動することで、やさしさの本質を学んでいくのだと思います。

ブロックの先生方や、子どもたちと、「モチモチの木」を読み合う中で、私自身が、改めて斉藤隆介の作品に感動できました。